

九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 6 1
2008(平成20)年4月18日(金)発行



<1943(昭和18)年4月18日は、日本海軍連合艦隊司令長官山本五十六の戦死の日>
山本五十六やまもといそろく(1884~1943)は新潟県長岡生まれ。旧海軍軍人。日独伊三国同盟の締結に反対。1940年海軍大将。太平洋戦争で海軍の総指揮をとり、真珠湾攻撃やミッドウェー海戦などの作戦を実施。1943年ブーゲンビル島上空で米空軍の攻撃で戦死。59歳だった。山本の死は国民には伏せられ5月31日になって発表された。「今の若者はなどと口はばたきことを申すまじ」は五十六のことば。

今新訳本で 哲学者カントの「永遠平和のために」が注目されています

カントの「永遠平和」を受け継ぐ憲法九条



200年前のドイツの哲学者カント(1724~1804)は、難解な内容で有名ですが、『永遠平和のために』という著作だけは、当時戦争に明け暮れていた政治家にも読ませるため分かり易く簡潔に書かれているそうです。

200年も前に、まるで現代を見通していたかのような言葉が並んでいます。表向きは「平和」といいつつ、結局は戦争の手段を選ぶ世界の政治家に読ませたい。このカントにも憲法9条の一つの大きな水脈を感じます。

<3月31日付「朝日新聞」・早野透「ポリティカにっぽん」より同時に「九条の会」や小田実のことも紹介されています>

200年前に 今を見通すカントのことば

- 「戦争状態とは、武力によって正義を主張するという悲しむべき非常手段にすぎない」
- 「いかなる国も、よその国の体制や政治に、武力で干渉してはならない」
- 「殺したり殺されたりするための用に人をあてるのは、人間を単なる機械あるいは道具として国家の手にゆだねることであって、人格にもとづく人間性の権利と一致しない」
- 「対外戦争のために国債を発行してはならない」
- 「常備軍はいずれ、いっさい廃止されるべきである」
- 「戦争を起こさないないための国家連合こそ、国家の自由とも一致する唯一の法的状態である」
- 「永遠平和は空虚な理念ではなく、われわれに課せられた使命である」



(カント『永遠平和のために』池内紀訳・集英社/中山元訳・光文社古典新訳文庫)



▲04年「自衛隊のイラク派兵反対」のピラ配りで3人が75日間も留置場へ。結局は最高裁で罰金20万~10万円の有罪確定。「表現の自由」はこれでいいの。社会を縮こまらせてしまうのではない。映画『靖国』の上映中止や、ホテルが日教組集会を断ったのと根っこは同じで、国家が「プライバシー」や「公共の福祉」の名目で個人の生活に入り込んできます。「九条の会」など市民運動への嫌がらせ、警鐘なのか。

▲老人福祉なんて全くの嘘。後期高齢者新医療制度だなんて、本当にひどすぎます。悪政ここに極まれり。社会保険庁にも呆れはて怒りも...

▲中国の中毒餃子事件もウヤムヤ。すべての食料品が値上げの春。無策放任の農政のため日本の食料自給率は39%で、先進国中最低。安心の国内産食料を見直す機会といわれていますが。

▲自衛隊の一連の不祥事件や衝突事故、米軍の暴行事件。何が米軍への思いやり予算。やはり軍隊は廃止して災害救助隊に変えましょう。予算は国民の福祉、老人福祉に振り向けましょう。

▲日本の政治が国民を向いていない元凶は、与党衆議院議員の50%以上が2、3世議員だからといわれています。ガソリン代がどうのとか、1円単位の生活なんて分かるわけありません。自分の保身と利権だけの国会議員や地方議員も多く、今“議員の質”も問われ始めています。

◆九条のこと、戦争と平和、政治への不信や不満など事務局までお寄せ下さい。匿名可です◆

ネット 500円
事務局にお知らせ
TEL. 22-8631

新潟県福島ネットワーク・アサツユ200号記念講演会

地震列島 広瀬隆が語る 原発は大丈夫か!?

■日時/4月26日(土)午後2時~5時
■場所/いわき市文化センター大講義室
主催/新潟県福島ネットワーク・TEL.0246-58-5570(佐藤) 資料代500円

○品川正治さん講演会○
5月19日(月)13:00
福島市・駅西口
コラッセふくしま

原町区出身・反骨のドキュメンタリー映画監督 亀井文夫をご存じですか？

原町区本町生まれ・父は原町町長



亀井文夫は、1908（明治41）年4月1日、相馬郡原町大字南新田字町101番地（現在の南相馬市原町区本町二丁目85番地）で、父松本良七、母くにの次男として出生します。

父松本良七は、原町村村会議員、原町町会議員、3期の福島県会議員を経て明治44年から大正6年までの6年間は原町町長でした。

ソヴィエト連邦に留学 映画との出会い

文夫は6歳まで原町で過ごし、母方の祖母の亀井なつ（仙台市花壇川前）が死亡し、その家督を相続したため、姓を亀井と名乗ります。仙台市の南材木町小学校に入学、さらに母と兄妹とともに上京し、淀橋第一小学校、早稲田中学校を経て、21歳で文化学院を3年で中退。絵の勉強のためソヴィエトに渡るが、たまたま見た『上海ドキュメント』という映画に感動し、映画の虜になる。レニングラード映画技術専門学校の聴講生になり、映画の猛勉強を開始。

1931（昭和6）年に帰国し、東宝映画に入社。昭和10年最初の監督作品『姿なき姿』を制作。ドキュメンタリー映画を中心に、昭和62年、78歳の病死まで約50本の映画を制作しました。

□亀井は戦争中も戦後も生涯一貫して、地球のすべての生命を尊び、人間の傲慢さ、自然と人間の共存を訴え、反戦・反核・反基地・反差別・反環境破壊の先駆的な記録映画を制作しました

●二宮仕法の偉人たちの同様に、様々な郷土の先人の生涯やその業績にも関心をもちたい。

見りたば家七残市一政で日八
洗ッのら業年に九友生、
礼クで母のま、移一会ま福明
を信あが米で、一五のれ島治井
（「わんぱくいる。井はしはめかノが家、原四一
幼トいつ。一に台、憲町一〇

「亀井文夫著 岩波新書『ただたかう映画』より」

亀井文夫監督の主な作品

○1938年『上海』 行進してくる日本軍を鋭い眼で睨む中国人<下写真>、日本兵のなどで厭戦映画となっている。



○1939年『戦う兵隊』 陸軍省の後援で制作するが、巧妙な反戦映画として完成。直ちに公開禁止になり、亀井は治安維持法違反で投獄された。



○1941年『信濃風土記より・小林一茶』

一茶の俳句をとおし信濃を描く。

○1946年『日本の悲劇』 戦争犯罪を追求するが、GHQはフィルムを没収した。

○1953年『女ひとり大地を行く』 当時の人気スター山田五十鈴・宇野重吉が主演のドラマ。脚本新藤兼人。

○1956年『生きていてよかった』 被爆者の生活実態や偏見を告発した。

○1957年『世界は恐怖する』 原爆の放射能や死の灰の恐怖を赤裸々に訴えた。

○1960年『人間みな兄妹・部落差別の記録』 戦後になっても残る部落差別を批判。

○1986年『トリ・ムシ・サカナの子守歌』

人間は知恵によって栄え、知恵によって滅びる宿命なのか。人間以外の生物の声を聞けと病身をおして訴えた。遺作。

どこのか鈴木安蔵とオーバースラップするその生涯・業績

○2008年は「亀井文夫生誕100年」○

○小高や原町や相馬には権力に抗ったり、時代に警鐘をならす人物を生み出す“風土”があるのか。

○亀井については15年前の1993年に、「亀井文夫の映画を見る会」が原町で開催されています。が、今再び「九条」や平和や人権、環境問題を考えるため、映画はビデオ化されて事務局の手元にあるので、『戦う兵隊』鑑賞会などはどうでしょう。少人数でもすぐに開催できます。